Devil May Cry 4 ~StrikerS~

ネロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｄｅｖｉｌ　Ｍａｙ　Ｃｒｙ　４　～Ｓｔｒｉｋｅｒｓ～

【Ｎコード】
Ｎ０３８８Ｙ

【作者名】
ネロ

【あらすじ】
魔剣教団教皇が起こした「救済」が２人のデビルハンターに阻止されてからから１年余りが過ぎた。そのデビルハンターの１人である青年ネロはその後も悪魔を狩り続けていたが、ある日依頼の後、拾った一つの赤い宝石によってネロの新たなる戦いが始まった。

Ｍｉｓｓｏｎ：１　~転移~　（前書き）

自分の中で一番やってみたかった小説です！この組み合わせはありますが、似た感じにならない様に気を付けます！※『Ｍａｇｉｃａｌ　Ｔｒｉｇｇｅｒ』、『～Ｄｅｖｉｌ　Ｍａｙ　Ｃｒｙ《ｓｔｏｒｙｓ　ＭＩＤ－ＣＨＩＬＤＡ》～』を書いているｋｉｄさんから許可を頂いて書いています。

Mission：1 ~転移~

とある部屋の机から受話器の古くさいベルの音が鳴り響く。
その音を聞いた1人の銀髪の男が受話器を取り、応答する。
受話器で応答していた男は短い会話をしながらメモを取り、受話器を置いた。

「さて、仕事の時間だ…」

男はそう呟くと紺色のコートを羽織り、机に置いてある銀色の装飾銃を指で回しながら腰のホルスターに収め、部屋の隅に立てかけてあった身の丈程の長さの剣を背中に背負った。

「ネロ…また悪魔の依頼なの？」

仕事の準備をしている男に白い修道服の様な服を着た茶髪の女が声をかける。

「ああ。けど敷地内に現れたんだ。夕方には戻るよ。キリエ」

ネロと呼ばれた男はキリエという女に優しく言った。

「でも、最近依頼が多いみたいだから……」

キリエが俯きながら言う。

「仕方ないさ。悪魔を野放しにしたら、他の人にも危険が及ぶ。そ

の悪魔を狩れるのは俺しかいないんだ。わかってくれよ」
ネロが言い聞かせる様に言う。
「うん、わかってる。なるべく早く帰ってきてね」
キリエは心配そうな声でそう言った。
ネロが左手を挙げながら返事をする。
「じゃあ、行ってくる」
キリエも心配な気持ちを抑えながら返事をする。
「いってらっしゃい」
依頼はいつもと同じだった。
「確か港の方って言ってたな」
先程書いたメモを見ながらネロが呟く。
市街地から商業区を抜けると港がある。ネロの住んでいる街、城塞都市フォルトゥナは外界とは隔離された街で島の面積もそう広くはない。
故に市街地から港までは案外簡単に行けるのだ。
「ここか……？」

依頼内容を書いたメモを見ると港の倉庫と書いてある。
倉庫内に入ってみるが、誰もいなかった。
しかし、ネロにはここに標的がいると言える確信があった。
「間違いなさそうだな…」
ネロがそう呟くと、倉庫の天井から無数の黒い影が飛び降りてきた。
しかしネロはそれがわかっていた様に横に転がり、飛び降りてきた黒い影から距離を取る。
ちなみにネロが狩るのは鳥でも動物でもない。
「不意打ちか。ま、お前ららしいけどな」
ネロの前に現れたのはズタ袋を着たカカシに手足に巨大な刃物が取り付いた様な化け物、俗に言う『悪魔』である。
「『スケアクロウ』か…拍子抜けだな」
ネロは苦笑するとスケアクロウと呼ばれた悪魔に向かって突進すると、スケアクロウの顔面目掛けていきなり回し蹴りを決めた。
ブーツの踵が思い切りめり込んだスケアクロウは後方へと吹っ飛ぶ。
それを見た他のスケアクロウが手足の刃物を振り回し、ネロへと飛び掛かっていった。

しかしネロはそんな攻撃もお見通しだと言わんばかりに背中の大剣レッド
クィーンで向かってきたスケアクロウ全ての攻撃を受け止めた。
無数の刃物とレッドクィーンが衝突し、火花が散る。１対多数。傍から見ればネロが圧倒的に不利に見える。
しかしネロはその状況に屈する事は無かった。
「ハハッ！」
即座にスケアクロウの刃物を押し切りつつ、レッドクィーンの柄を捻る。その瞬間、レッドクィーンの峰からが大量の炎が噴き出し、轟音をあげながら向かってきたスケアクロウ全てを後方へと吹っ飛ばした。
ネロの持つ大剣レッドクィーンには『イクシード』と呼ばれる剣撃の速度を向上させる機能が搭載されている。
剣の柄がバイクのアクセルの様になっており、それを捻る事で装置が燃焼、柄の根本にあるクラッチレバーを握る事で峰から推進剤が噴射されるのだ。
しかし、レッドクィーンはネロ専用に推進剤の噴射量を限界まで高めるという改造が施してあった。想定外の噴射の所為で推進剤と共に大量の炎が吹き出してしまう。
この改造を施されたレッドクィーンは一般の人間が扱う事は不可能で、人並み外れた戦闘能力と天性の感を持つネロに扱えない程に凄まじい推進力を持ってしまっていた。

ネロはイクシードの燃焼を促しながら、吹っ飛んだスケアクロウへと間合いを詰める。

飛ばされたスケアクロウも起き上がり、ネロの方へと詰め寄っていた。

ネロはクラッチを握りながらレッドクィーンを横薙ぎに振るう。スケアクロウの柔らかくブヨブヨした身体にレッドクィーン刃がめり込む。

「Ｄｉｅ！（死ね！）」

叫び、剣を振るいながら柄を捻ると燃焼を促されたイクシードが大量の炎と共に噴射される。

その勢いで周囲に群がるスケアクロウを倉庫の隅へと吹き飛ばす。

その勢いを利用し、吹き飛ばされたスケアクロウに更なる追撃を掛ける。

炎と共に斬り付けられたスケアクロウは黒い霧をまき散らしながら消滅した。

残った数体のスケアクロウは腰のホルスターに収納してある装飾銃『ブルーローズ』で処理した。

この銃も対悪魔の為にネロが様々な改造を施している。

最大の特徴は縦に並んだ２つの銃口だろう。

発砲と同時に発射された2つの弾丸がスケアクロウに命中し、白濁とした液体を飛び散らせながら、次々と消滅していく。

消滅したスケアクロウのいた場所に見慣れない赤色の六角形の石が落ちていたのだ。

「何だこりゃ……？」

ネロがそれを右手で拾い上げると、包帯を巻き、グローブを着けた右腕が突然疼いた。

次の瞬間、赤い石が強烈な光を放ち、ネロの姿はフォルトゥナから消えた……

Ｍｉｓｓｏｎ：１　～転移～（後書き）

難しい…この一言に尽きます。戦闘描写とか書いた事があまり無いので……

感想とかお待ちしております！

Mission：2 ~邂逅~

「ぐっ……」

目を覚ますと、そこは見た事の無い土地だった。

「何だここは……？俺は港の倉庫の中にいたはずだ……」

身体を起こしながらここまでの事を思い返した。

いつもの様に悪魔討伐の依頼を受け、港の倉庫内にて、悪魔を討伐、その後見た事のない赤い宝石を拾って意識が途切れたのだった。

「そういえば……あの石はどこに……」

ネロはそう呟き不意に右腕を見る。

右腕の袖を肘の辺りまで捲り、グローブと包帯を取ると、そこには人の腕ではない異形の右腕があった。

鱗のような外殻で、手の甲から肘の付近まで亀裂が走っており、その亀裂からは青白い光がぼんやりと光っていた。

指先の爪も尖っており、まさしく「悪魔の腕」と呼ぶに相応しい腕だった。

「やっぱりここにあったか…」

ネロが赤い宝石をイメージすると、右手に先程拾った赤い宝石が現れた。

「普通に考えて、こいつのせいでこんな事になったんだよな…」

ネロが溜め息をつく。

周りを見回すと、どうやら森のようだ。

人の手が入っていないのを見るとどうやら森のど真ん中らしい。

「まぁ、フォルトゥナじゃないらしいな」

ネロは空に昇っている2つの月を見てそう呟いた。

ネロの住んでいるフォルトゥナでも時折紅い月が昇る事があったが、流石に月が2つ昇るなんて事は無かった。

「取り敢えず、人がいればいいんだけどな…」

人がいればここがどこなのかを聞き出せるかもしれない。

幸い武器は1つも掛ける事なく揃っている。

万が一戦闘する事になっても問題はなかった。

しかし、一番厄介な問題が1つだけあった。

帰る方法がない。

キリエにはすぐ帰ると言ったがそれも怪しくなってきた。

「取り敢えず、身体を休める場所探さないとな」

赤い宝石を右腕に吸収し、ネロが歩き出した時……

ガサッ！！

「！？」

ネロの目の前の茂みから物音がしたのだ。
右腕は疼いていないから悪魔では無いようだ。
悪魔が近くにいる時、ネロの右腕は必ず疼くのだ。

「（悪魔じゃないみたいだが、嫌な感じだな……）」

ネロが心の中でそう思ったとき、茂みの中から”何か”が飛び出してきた。

「チッ！」

慌てて飛び退き、飛び出してきたものから距離を取る。

ソレはボディに複数の目の様なものを持つカプセル型やボール型のロボットだった。ボディからは黒い無数のアームが飛び出ており、お世辞にも気持ちのいい外見ではなかった。

「悪魔…じゃないみたいだが、お友達になりたいって感じでもなさそうだな」

ネロがロボットの群れに言葉を投げかけると同時に、ロボットは目の様な部分から青いビームをネロに向けて発射する。

「……ハッ！」

その攻撃を横に転がり、難なくかわすネロ。
それを見たロボットはネロに向けて無数のアームをネロに向けて延

ばす。
その攻撃を背中に背負ったレッドクィーンで弾き飛ばす。
「ハッ！喧嘩がしたいなら他所へ行けよ！」
レッドクィーンによって弾かれたアームはそのまま1体のロボットのボディに当たり、そのロボットが周りのロボットを巻き込んで横転する。
「Ｉｆ　ｙｏｕ　ｗａｎｔ　ａ　ｆｉｇｈｔ，　ｔｈｅｎ　ｃｏｍｅ　ｏｎ！（本気でヤる気か？来いよ！）」
地面に突き立てたレッドクィーンの柄を捻り、ロボット達を挑発するネロ。
本来なら喧嘩などしている場合ではないが、相手が襲ってくるなら仕方が無い。
ロボット達がボディを起こしながらビームをネロに向けて一斉発射する。
「馬鹿の一つ覚えだな…」
そう呟きながら、跳び上がり、ビームによる攻撃を回避する。
同時にレッドクィーンの柄を捻り、イクシードを燃焼させる。
「Ｂｅ　ｇｏｎｅ！（失せろ！）」
叫び、クラッチを押し込むと、峰から大量の炎と共に推進剤が噴出する。
その勢いに任せ、ネロはレッドクィーンでロボットのボディを天辺から一気に両断する。

両断されたロボットはショートし、爆発する。
それを見たロボット達がネロを取り囲む様に移動する。
「そういう所は”アイツ等”にそっくりだな！」
レッドクィーンを背負い、腰のホルスターに携行しているブルーローズを構える。
「さっきのビームのお返しだッ！」
そう言いながら、正面のロボットに向けてブルーローズの弾丸を発射する。
銃口から放たれた2発の弾丸は狙った標的に当たった。
銃弾を喰らったロボットは先程両断されたロボットと同じ様に爆散する。
ロボット達が青白い光の結界の様なものを展開させる。
「あ？」
攻撃を防ぐバリアの様なものだろうか？そう思いネロは試しにブルーローズを発射する。
銃弾は結界を貫通し、そのままロボットに直撃する。
「ただの飾りか？」
ブルーローズを指で回しながらホルスターに収め、レッドクィーンに武装を切り替え残りのロボット達を殲滅していく。
レッドクィーンの攻撃も、ロボットの結界のようなものの干渉を受

ける事は無かった。

数分後、ネロは銃弾で撃ち抜かれ、剣撃の痕が刻まれた無数のロボットが積み重なった山の上に立っていた。

「呆気ねぇな……」

左手でレッドクィーンを背中に収め一息つく。

「さてと…」

襲ってきたロボット達に物足りなさを感じつつも、ネロがロボットの山から降りようとした時、妙な気配を感じた。

「さっきの奴らとは違うな…。これは”人”か？」

ネロが不意に空を見上げると、確かに“人”がいた。
どうやらこちらに視線を向けており、視線を外さぬまま、地面に降り立つ。

「時空管理局、機動六課ライトニング分隊隊長、フェイト・テスタロッサ・ハラオウンです。武装を解いて、私と一緒に来てください」

黒い軍服の様な服装、その上に白いマントを羽織り、手には黒い戦斧の様な形の杖を持った金髪をツインテールにした女が話しかけてきた。

「どうした？テスタロッサ」

金髪の女…フェイトを追う様にして彼女と同い年くらいの桜色の髪を一つに束ねたポニーテールに濃い桜色の服装に淡い桜色のジャケットを羽織った女が降りてきた。

ポニーテールの女は積み重なっているロボットを見た後、隣にいるネロに視線を移した。

「私は機動六課ライトニング分隊副隊長のシグナムだ。悪いが私達と一緒に来てもらおうか」

状況がよく解らなかったが取り敢えず考えてみた。

訳の分からない場所に居て、突然の襲撃を受け、その後、空から降ってきた女2人に一緒に来いと言われた…

人を探すのが目的の1つだったがこんな得体の知れない連中の言う事を聞く程ネロは素直じゃなかった。

「嫌だって言ったら？どうする？」

ネロが不敵に笑い返答すると、ポニーテールの女…シグナムもすぐに言葉を返した。

「悪いがそう言うわけにもいかなくてな…。ガジェットを破壊したのはデバイスではなく質量兵器だな？何故お前の様な者がここにいるのか…色々聞きたい事がある」

「それにそのガジェットはロストロギアに反応して動くんです。あなたまさか…レリックを持っているんですか？」

取り敢えず、このまま逃がしてくれるという雰囲気ではなかった。
しかし、何を言われようともネロの返事はもう決まっていた。

「だったら、力づくでやってみろよ…！」

背中からレッドクィーンを抜き、切先をフェイト達に向ける。

「いいだろう…」

シグナムはそう言うと、神速とも言える速さでネロとの間合いを詰め、愛剣レヴァンティンを鞘から抜き、ネロに斬り掛かった。
しかし、その攻撃はレッドクィーンによって止められていた。
お互いの刃が衝突し、火花が散る。

「何だと！？」

「予想以上に速いな…けどなっ！」

ネロがシグナムに蹴りをいれる。

「ぐっ！」

蹴りを入れられたシグナムはネロから距離を取った。

「シグナム！」

フェイトがシグナムに駆け寄るが、シグナムはそれを左腕で制した。

「テスタロッサ…これ以上は無駄だ。こうなったら奴を気絶させてでも連れて行くしかない…」

シグナムがレヴァンティンを構える。

「どうした？2人まとめて掛かって来いよ？」

ネロがレッドクィーンを地面に突き立て柄を捻る。

「その必要は無い。お前1人を捕らえる事など、私1人で十分だ！」

「言ってくれるじゃねぇか！まぁ、そう来なくちゃな…」

再びお互いの剣が衝突する。

「あのロボットを俺が壊した事に怒ってんのか？生憎、俺も襲われた身でね…正当防衛って事にしてくれよ！」

「そんな事はどうでもいい。私達の目的は貴様の持っているロストロギアだ！」

「ロストロギア？」

お互いに剣を離し、間合いを取る。
同時にお互いに相手の事を分析していた。

「（こいつ、本当に女かよ…腕力も剣の腕も相当のモンだな…）」

「（リミッターが掛かっているとはいえ、この私を左手一本で相手にするとは…この男できる！）「レヴァンティン、　カートリッジロード！

魔力を込めた弾丸が剣の峰から排莢され、レヴァンティンの刀身に炎を纏う。

「なっ…！？」

ネロもレッドクィーンの柄を限界まで捻り、イクシードをフル燃焼させ、シグナムに正面から立ち向かう。

「紫電一閃！！」

「Ｃｒａｓｈ！（壊れろ！）」

炎を纏った剣と剣のぶつかり合いの中、徐々に押され始めたのはネロの方だった。

「何！？」

シグナムの攻撃により、レッドクィーンはネロの手から外れ、近くの樹に突き刺さった。

慌てて、シグナムから間合いを取ろうとするが、勢いを殺せなかったシグナムの一撃がネロの眼前へと迫っていた。

「チッ！」

舌打ちをしたネロはコートのポケットから右手を出し、シグナムの剣を掴み上げた。

「なっ！？」

それを見たシグナムが顔をしかめる。

「その腕は……」

後ろで戦闘を見ていたフェイトもネロの右腕を見て驚く。

「まさか、こいつを使う事になるとはな……」

「貴様……！」

シグナムが後方に下がり、ネロとの距離を開ける。

「その腕は一体……」

フェイトがネロに問う。

「こいつか？こいつは悪魔の右腕。俺はそう呼んでる」

「悪魔？」

ネロの言葉に2人は困惑する。

「貴様…ふざけているのか！」

シグナムが怒鳴る。

「ふざけてるも何も……」

不意にネロが言葉を切り、腰のホルスターからブルーローズを抜き、発砲する。

シグナムとフェイトが身構えるが、発射された弾丸は2人の間を縫

い、2人の背後にいたスケアクロウへと命中する。
周囲に目を向けると、3人の周りを無数のスケアクロウが取り囲んでいた。

「これは…アンノウン？」

「アンノウン？」

フェイトの言葉にネロが反応する。

「貴様、”アレ”を知っているのか？」

シグナムがレヴァンティンを構えながら問う。

「知ってるも何も……」

言いながら、ネロはブルーローズの空薬莢を排出し、新たな弾丸を装填する。
同時にネロの右手が淡い光を放つ。

「こいつらが悪魔だよ！！」

銃に右手を添え、弾丸を発射する。
魔力を込めて発射された弾丸は正面のスケアクロウへと飛んでいく。
スケアクロウの顔面に弾丸が命中すると、弾丸は轟音と共に爆ぜた。
周囲のスケアクロウがグレネードを思わせる爆発に巻き込まれ吹き飛ぶ。
それを見た2人は唖然としていた。

「アンタ等が何を知りたいのかは知らないが、今はコイツ等をぶっ

潰すのが先だろ……」

ネロが銃をスケアクロウに向けながら言う。

「そうだな…貴様には色々聞きたい事があるが…それはコイツ等を斬り伏せてからだ！」

シグナムが向かってくるスケアクロウを斬り飛ばす。

「シグナム！そんな……」

フェイトが慌てる。

「おい！フェイトだっけか？」

ネロが銃でスケアクロウを吹き飛ばしながらフェイトに呼びかける。

「え？」

「戦う戦わないはアンタの自由だが、そこに突っ立ってると死ぬぜ？」

ネロが不敵に笑う。

「奴の言う通りだ。テスタロッサ、話を聞くのはコイツ等を始末してからだ！」

シグナムが炎を纏ったレヴァンティンでスケアクロウをまとめて斬り裂く。

「ああ、もう！」

フェイトは手にした戦斧バルディッシュを鎌状にしてスケアクロウを斬り飛ばす。

「そう言えば名前を聞いていないが……」

背中を合わせたシグナムがネロに言う。

「そう言えばまだだったな……俺の名はネロ……」

言いながら拳を握る。

すると、右腕の隣に巨大な青白い腕が出現する。

ネロが、右手を突き出すと青白い腕がスケアクロウに飛んでいき、胴体を鷲掴みする。

「ただのデビルハンターだよ！！」

叫び、右腕を振り下ろすと、スケアクロウを掴んだ腕がスケアクロウを地面に叩き付けた。

Ｍｉｓｓｏｎ：２　～邂逅～（後書き）

戦闘描写を書くのに慣れてきました。

この調子でどんどん書いていきたいです！

感想お待ちしております！！

Ｍｉｓｓｏｎ：３　～悪魔討伐～

「俺は…ただのデビルハンターだよ！！」

名乗りながら、デビルブリンガーで拘束したスケアクロウを地面に叩き付ける。

叩き付けられたスケアクロウは黒い霧を飛び散らせながら消滅する。

周りを取り囲んでいたスケアクロウも次々とデビルブリンガーに拘束され撃破されていく。

最後の１体を倒したネロは手首を数回降りながら、先程、シグナムに弾き飛ばされ、樹に刺さったレッドクィーンを左手で引き抜き、背中に背負う。

「あなたは…アンノウンの事を知っているんですか？」

フェイトのアンノウンという言葉にネロが反応する。

「アンノウン？そういえば、さっきもそんな事言ってたな……」

「あなたが今倒した未確認生命体の事です」

「（……なるほどね）」

フォルトゥナでは悪魔が頻繁に現れるため、フォルトゥナの住民全員が悪魔の存在を知っている。

ここには悪魔が存在しないのだろうか？

と、言っても外の世界には悪魔が現れる事は少ないため、悪魔を知

らなくても何ら不思議な事ではないと、ネロが思っていると、シグナムが口を開く。

「貴様はさっきの未確認生命体の事を悪魔と呼んでいたな」

「ああ…奴らは魔界から人間界に現れて人の命を奪う…最低最悪な奴らだ」

ネロが吐き捨てる様に言う。

「先程の未確認生命体は私達の方では最近になって確認されたんです。あなた…ネロさんの所には頻繁に現れるんですか？」

「ああ…俺の故郷だと毎日の様に現れるな。ちなみに俺はソレを狩るのが仕事だ」

「ネロさんの故郷では先程のアンノ…悪魔とは違う個体も存在するんですか？」

「呼び捨てでいい。さっき倒したのはスケアクロウ。ズタ袋に虫みたいなのが入った雑魚だ」

「今の話を聞くに、貴様は他の悪魔の事も随分と知っているようだな。まだ何か知っている事があるのか？」

「だったら？」

「貴様を連れて行く。そして詳しい話を聞く」

「（またソレか…）」

さっきから同じ返答しか返ってこない事にネロは正直うんざりだった。

「そして、仮に貴様が何も知らないとしても、貴様の持っているその武器は”質量兵器”の様だ。ならばソレを理由に貴様を連れて行く」

シグナムがレヴァンティンを構える。

「あの…私達は今回現れたあの生物の事を何も知らないんです。出来れば、詳しい話を聞かせてもらえませんか？」

武器を構え、痛い程の殺気を放ちながら話すシグナムに対し、フェイトの方は極力相手の機嫌を損ねない様に話していた。

「話す話さない、着いて行く着いて行かないは別として…」

ダルそうにしていたネロが後方に向けていきなりデビルブリンガーを延ばす。

「まずはコイツを始末しないとな！！」

ネロがデビルブリンガーで掴んだのはスケアクロウに似た悪魔だった。

しかし、先程のスケアクロウとは比べ物にならない程大きく、手足に付いた巨大な刃物の数も増えていた。

「人が話してる時に割り込むのはマナー違反だろ！！」

デビルブリンガーで巨大なスケアクロウ…メガ・スケアクロウ（以後、Ｍスケアクロウ）を地面に叩き付けた後、ネロは右足で思い切り蹴飛ばした。
吹っ飛んだＭスケアクロウは後方の樹に激突し、地面に倒れる。
激突の際に背中の巨大な刃物が当たり、樹はバラバラになった。

「Ｈｏｏ！　Ｃ'ｍｏｎ！」

ネロが拳法の様な構えをしながらＭスケアクロウを挑発する。
起き上がったＭスケアクロウは両腕の刃物を回転させながらネロ達に向けて発射する。
ネロはそれを転がってかわし、フェイトとシグナムは防御壁を展開させて刃を弾く。

「さっさと片付けるか…」

呟き、背中のレッドクィーンの柄を捻りながらＭスケアクロウに突進する。

「Ｂｌａｓｔ！（吹っ飛べ！）」

イクシードを燃焼させたレッドクィーンを逆手に持ち替え、Ｍスケアクロウを斬り裂きながら上空へと打ち上げる。
打ち上げたＭスケアクロウと共にジャンプしたネロはレッドクィーンによる連撃をＭスケアクロウに撃ち込んだ。
空中ではまともに反撃できないＭスケアクロウはされるがままに斬られ続けた。

「オラァ！」

ネロがＭスケアクロウをデビルブリンガーで掴み上げ、空中で数回振り回し、地面に叩き落とす。

「Ｄｉｅ！（死ね！）」

再び逆手に持ち替えたレッドクィーンのクラッチを握りながら、炎を纏いながらＭスケアクロウの胴体にレッドクィーンを突き立てる。その攻撃を受けたＭスケアクロウは不快な声を挙げ、大量の白濁色の液体を飛び散らせて消滅した。

「すごい…」

「これが奴の力か…？」

ネロの流れる様な攻撃にフェイトとシグナムが各々の感想を述べる。

「おい！早くそこから離れろ！」

ネロが突然大声を出し、手にしたレッドクィーンを投げ捨て、フェイトとシグナムの方へ跳ぶ。
急な事態に反応出来ず、２人はネロに押し倒される事で地面に伏せた。

「あなた…一体何を！？」

フェイトが問うと、先程までフェイト達が立っていた場所にＭスケアクロウの物と思われる刃物が落下し、地面に深々と突き刺さった。
Ｍスケアクロウは自らの死を迎えると同時に背中の刃物を上空へと飛ばす。
故に倒したと思って油断するとその刃の餌食となってしまうのだ。

もし、ネロが2人を押し倒さなければ、2人は刃によって大怪我をしていただろう…

「助けてくれたのか…礼を言わせてもらう」

起き上がりながらシグナムが礼を言う。

「まぁ、無事で良かったな…」

ネロがそっぽを向きながら言う。

「あなた…その傷！」

フェイトがネロの左腕を見ながら叫ぶ。
先程2人を助けた際に斬られたのだろう。

「こんなの大した事ねぇよ…」

ネロが右腕で左腕を押さえながら言う。

「でも、出血してるし…治療した方がいいです！」

「大した事無いって言ってんだろ……」

ネロは投げ捨てたレッドクィーンを拾い上げ、背中に背負った。

「ぐっ！？」

ネロが顔をしかめ、膝を付く。

「思ったよりざっくりやられたな…」

意識が遠のいていくのが自分でもわかった。
しかし、今倒れたらどこに連れて行かれるかわからない。
そう思いながら、必死に意識を繋ぎ止めようと努力する。
意識が遠のく中、右腕に包帯を巻き、グローブを付け、袖を伸ばし、右腕を完全に隠す。
フェイト達が駆け寄り、何かを叫んでいるのがのが見えたが、何を言っているのかはわからない。
ネロの努力も虚しく、ネロの意識は深い闇の中に落ちた。

暗闇の中に俺はいた。
目を閉じると”あの時”の事が鮮明に頭の中に入って来た。
そう、俺の右腕がまだ人間の腕だった頃、森に現れた悪魔をキリエを守りながら討伐していた時だった。

「キリエ！速く逃げろ！！」

俺が叫ぶと同時にトカゲのような悪魔…アサルトが逃げるキリエに向けて無数の爪を発射した。

「くっ！」

慌てて右手のレッドクィーンで飛ばした爪を叩き落とそうとしたが、怪我をしている右腕を満足に振るう事が出来なかった俺はアサルトの爪を完全に落としきる事が出来なかった。
落としきれなかった爪の破片の一部がキリエの肩を抉った。

「うおおおっ！！」

叫びながら、アサルトの腹部に銃弾を撃ち込みまくった。
アサルトの死骸が消える頃には肩から血を流したキリエが倒れていた。

「くそっ！！」

怒りに身を任せ、怪我をしている右手で地面を殴りつける。
痛みは感じなかった。痛みよりもキリエを救えなかったという悔しさの方が俺の感情を支配していた。

その日から俺は力が欲しいと願い続けた。
キリエを…大切な人を守る事の出来る強い力が欲しいと願った。

「まぁ、その結果が”コレ”か…」

呟きながら現在の自分の右腕を見る。
自分が力を欲したからか、あるいは別の理由か、俺の腕は悪魔のような腕に姿を変えてしまった。

結局、俺はこの腕で大切な人を守る事が出来たのだろうか？
大切な人を笑顔にさせられたのだろうか？

「キリエ…」

ネロはそこで目が覚めた。周りを見渡すと、そこはどうやら病室らしかった。
自分の身体に目を向けると、包帯が巻いてあった。

壁に掛かっている時計を見る。
文字は読めないが、時計の角度からして午前3時を過ぎた頃だ。

「まぁ、もう少し寝ておくか…」

呟き、目を閉じると、すぐに睡魔に襲われ、ネロの意識は再び眠りについた。

Ｍｉｓｓｏｎ：３　～悪魔討伐～（後書き）

結局ネロって誰の息子なんでしょうね？

やっぱり、バージルの息子なのか？

感想お待ちしております！

Mission：4 ～協力～

朝日は昇り、1日が始まった。

「……朝か」

病室で寝ていたネロは窓から差し込む朝日で目を覚ました。

身体を起こし、左腕の包帯を取ると、傷は奇麗さっぱり消えていた。

ベッドから降りて、窓の景色を眺めると、礼拝堂の様な建物が見えた。

さらに遠くを眺めると、森が見えた。おそらく自分のいた森だろう。

「（あそこは俺のいた所か？じゃあ、ここまで運ばれたのか…）」

ベッドのサイドテーブルに畳んで置いてあった自分のコートを羽織り、右腕にしっかりと包帯が巻かれている事を確認し、部屋のドアを開け、外に出ようとする。

「キャッ！」

「うおっ…！？」

入り口にいた赤髪のショートカットに白と黒のツートンの修道服を着た女にぶつかりそうになる。

「目が覚めたんですね」

「ああ……あんたは？」

「失礼しました。私は聖王教会のシスター、シャッハ・ヌエラと申します。えっと…あなたは？」

「ああ…ネロだ。ここに俺を運んだのはあんたか？」

「いえ、あなたをここに運んだのは、騎士シグナムとフェイト執務管です」

「あいつらが？あの2人は、元気だったか？」

「はい。2人とも無事でしたよ。それと……ネロさんに感謝してました。今日もいらっしゃるのでお話はその時にでも」

「いや、俺は…」

言葉を返そうとしたネロをネロの腹の虫が遮った。

「……／／／」

「朝食の用意ができておりますので、一緒にどうですか？」

「ああ、悪いな」

ネロはシャッハに聖王教会のとある一室に案内される。

「ああ、目が覚めたんですね」

金髪の女がネロに挨拶する。

「聖王教会の騎士カリム・グラシアと申します」

「ああ、俺は…」

「ネロさん…ですよね？あなたのことはシグナムとフェイトから聞いています」

カリムの言葉にネロは黙るしか無かった。
自分の言うべき事を先に言われてしまったからだ。

「さぁ、席に着いてください。朝食をいただきましょう」

カリムが促し、ネロは言われるままに席に着いた。

……

「それで？俺はこれからどうなるんだ？」

テーブルにある料理を食べながらネロが聞く。

「そうですね…聞く所によると、あなたは次元漂流者のようなので…時空管理局によって丁重な扱いを受けると思います」

「次元漂流者？」

「次元の漂流者。あなたの様に別の世界からこの世界にやってきた者達のことです」

「なるほど…俺は迷子になっちまったって訳か…」

ネロが左手でフォークを弄りながら笑う。

「色々混乱しているかもしれませんが、安心してください。私達が必ずあなたを元の世界に帰れる様にしますから…」

シャッハがネロを不安にさせまいとフォローする。

「私達？あんたもその管理局って組織の仲間か？」

「はい。私は聖王教会の騎士団所属の騎士ですが、管理局の方にも籍を置いていますので」

「なるほど…」

ネロが納得する。

「それで？俺はこれからどうすればいい？アンタ達に保護してもらうとして、元の世界に戻れるまでここに入ればいいのか？」

「正しくは私達聖王教会と機動六課が保護すると言う事になりますね」

「機動六課？」

ネロの頭の中に昨日聞いた言葉が再生される。

『時空管理局機動六課所属の執務管、フェイト・テスタロッサ・ハラオウンです』

『私は機動六課ライトニング分隊副隊長のシグナムだ。悪いが私達と一緒に来てもらおうか』

ネロの頬を汗が伝う。

「今、機動六課って言ったか？」

聞き間違いであって欲しいと願いながらネロが聞く。

「そう言いましたけど…何か？」

「その機動六課ってトコにフェイトとシグナムって奴はいるのか？機動六課の隊長とか何とかって言ってたんだけど…」

「そういえば、ネロさんはあの2人とお話をされていらしたんですよね。それなら話が早くて、こちらとしても助かります」

カリムがにっこりと笑う。

今のネロにはこの笑顔が悪魔の笑顔に見えた。

「（そういえば…さっき、今日ここに来るって言ってた様な…）」

嫌な予感しかしなかったが、もう一度聞いてみた。

「もしかして、そのフェイトとシグナムって奴はここに来るのか？」

「先程も申しあげた通り、2人ともここに来ます。後、機動六課の部隊長である八神はやてという方も一緒に。9時にはいらっしゃると思いますよ」

シャッハが答える。

「は！？一応聞くけど…今何時だ？」

慌てて室内を見渡し時計を探す。

「今は…8時２０分です」

カリムが何も無い所からホログラムの様な画面を浮かび上がらせ、時刻を確認し、ネロに伝える。

「マジかよ…」

ネロは昨日フェイトとシグナムにした事を思い浮かべた。
成り行きとはいえ失礼な態度を取り、剣と突き付け挑発し、蹴りを入れ、悪魔との戦闘に巻き込み、右腕まで見せてしまった。

「最悪だ……」

ネロのテンションが一気に下がる。
あの2人が来る前にここから去ろうと思っていたネロの考えは粉々に打ち砕かれた。
こうなった以上、ネロに残された選択肢は諦めてその2人に会うしかない…だった。

……

「お見えになりましたよ」

カリムがホログラムの画面を見てネロに伝える。

「ああ…」

ネロがどうでもよさそうに答える。
ネロは椅子に浅く腰掛け、足を組み、テーブルに頬杖を付いていた。

しばらくすると、ドアが3回ノックされた後、茶色のローブを羽織った人間が3人入って来た。
フードを被ってるため顔は見えなかったが、部屋に入ると3人はローブを脱いだ。ネロの予想通り、3人の内の2人は見覚えのある顔だった。

「（やっぱりか…）」

3人の中でも一番小柄な茶髪の女がカリムとシャッハに挨拶をしていると、2人がこちらに歩み寄って来た。

ネロはそのままの姿勢で2人を見る。

「昨日はすみませんでした…機動六課から参りました。フェイト・テスタロッサ・ハラオウンです」

フェイトが挨拶をするが、ネロは

「知ってるよ…」

とだけ答えた。
室内に気まずい雰囲気が流れる。

「えっと…昨日は私達の所為で怪我をさせてしまって…本当にすみ

ませんでした…」

「いいよ別に。もう治ったし…」

「え？」

「ほら…」

ネロが左肩を見せると、昨日負ったはずの傷はどこにも無かった。

「そんな事より、こっちも聞きたい事があるんだけど？」

「何でしょうか？」

「俺の剣と銃はどこにある？探しても見当たらないんだが…」

「えっと…それは…」

フェイトの表情が曇る。

「何だよ？まさか処分したなんて事は無いよな？」

ネロの問いにフェイトの代わりにシグナムが答える。

「処分はしていないが…お前の武器を解析した結果、あれは質量兵器だという事が判明した」

「解析か…随分と勝手な事するなあんた達…」

ネロが自嘲気味に笑う。

「っていうか質量兵器って何だよ？昨日もそんな事言ってたよな？」

「魔力を使わない…　火薬や化学など魔力を使わずに大量破壊を生み出す事の出来る兵器の事です」

フェイトが説明する。

「その言い方からして、あんた達のは違うのか？」

「私達が使っているのはデバイスといって、魔力を使っての物理破壊は出来ますが、人を傷付ける事は出来ない設定になっています」

「だが…」

シグナムが口を開く。

「剣と銃を没収しても、貴様にはまだその右腕があるからな…」

右腕という言葉にネロの表情が険しくなる。

「ちょっと待った！」

カリムとシャッハに挨拶をしていた小柄な女がネロとシグナムの間に割り込む。

「あんたは？」

「古代遺物管理部、機動六課部隊長の八神はやてです」

「部隊長ねぇ…」

「そうです。よろしく！」

そう言うとネロの右腕を強引に掴み握手をする。
その行動を見たネロは少し驚いた。

「で？その部隊長様が俺に何の用だ？」

「貴様！主に対してその態度は何だ！無礼にもほどがあるぞ！！」

シグナムが声を張り上げる。

「主？こいつが？」

ネロがはやてを見ながら笑う。

「人をどう呼ぼうがアンタの勝手だけどな…アンタの遊びに付き合える程、俺は暇じゃねぇんだよ…」

「貴様ァ！！」

シグナムがネロに詰め寄り、胸ぐらを掴む。

「それ以上…主を侮辱する事は許さんぞ！」

シグナムは凄まじい殺気を放っていた。
怒りの所為か声がかなり低くなっていた。

「シグナム！ネロさんも！」

フェイトが止めようとするが…

「やってみろよ…！最も…今度は手加減しねぇからな…！」

胸ぐらを掴んだシグナムの手を逆に右腕で掴みながらネロが静かに…しかしはっきりと聞こえる様に言い返す。

もはや昨日の失礼な態度やその他諸々の事に対しての申し訳ない気持ちなどネロの中からはとっくに消えていた。

室内を何とも言えない気まずい空気が支配していた。

「シグナム！」

はやての声にシグナムが我に返る。

「主はやて…」

「あかんよ？昨日助けて貰ったんやろ？」

「はい…申し訳ありません」

シグナムがネロの胸ぐらから手を離す。

「すみません。うちの子、いい子なんやけど真面目すぎる所為か、冗談が通じなくて…」

「（冗談って…）」

はやての言葉にネロは拍子抜けする。

「ま…まぁ、取り敢えず、席に着いてお話ししませんか？」

気まずい空気を打ち消す様にカリムが全員に提案する。

……

全員が席に着くと、はやてが話を始める。

「話はカリムから聞いたと思いますが、ネロさんは元の世界に帰るまで私達機動六課と、ここ聖王教会で預かる事になりました」

はやてが話し続けるが、ネロは頬杖をつき、面倒臭そうに話を聞いていたが、気になる事がいくつかあったので質問をした。

「取り敢えず、俺は元の世界に帰れるのか？」

「あなたがいた世界の座標が特定出来れば帰す事が出来ますが、しばらく時間が掛かりそうなので…」

さっきカリム達から聞いた答えと同じだった。

「それと…悪魔をアンノウンとかって呼んでたよな」

「あなたが言っている悪魔という未確認生命体が最近になって多数見られる様になりました。姿形は様々ですが、ガジェットと違い、見境なく人間を襲い…殺害するというものです」

「ガジェット？」

「ロストロギアを追って行動するロボットの事です」

はやての代わりにフェイトが説明する。

「あれ、ガジェットって言うのか…」

ネロは昨日破壊したカプセル型やボール型のロボットの事を思い出し、納得する。

ロストロギアとは昨日拾ったあの宝石の事だろう。

「お話続けてもいいですか？」

と、はやて。

「ああ」

「ネロさんは悪魔との戦闘経験があるんですよね？」

「ああ。俺の故郷では毎日の様に現れるな」

「それってつまり、悪魔の事を良く知ってるって事ですよね？」

「何でも知ってる訳じゃない。本でしか見た事の無い奴だっているし、この前初めて見た奴だっていた」

「……」

はやてが黙り込む。

「何だよ？結局何が言いたいんだよ…」

ネロがめんどくさそうに言う。

「私達はまだ悪魔の事を良く知りませんから、対処法もわかりません…だから…」

「……」

はやての言葉をネロは黙って聞いていた。

「だから…私達に力を貸してください！」

はやてが頭を下げる。

「はやて！？」

「主！何故そんな！？」

フェイトとシグナムもはやての突然の行動に驚いていた。

「お…おい…」

突然の言葉にネロも状況が呑み込めていなかった。

「やめろよ…頼むから頭を上げてくれ」

人にそんな事をされた事の無いネロはどうしていいかわからなかったが、取り敢えず、はやてに頭を上げさせた。

「預かっている物もお返ししますし、あなたに必要な物も…」

はやてが喋り終える前にネロがそれを遮った。

「出来もしない事言うなよ。本当は無理なんだろ？そんな事…」

ネロの言葉を聞いたはやてが俯く。

どうやら図星だったらしい。

「まぁ…でも…助けてもらったから、借りは返さねぇとな…」

その言葉を聞いたはやてが顔を上げる。

「それって…」

「借りは返すって言ってんだよ…」

そっぽを向きながらネロが小さな声で言う。

「本当ですか？ありがとうございます！！」

はやてが身を乗り出し、ネロの右手を掴み上下に振る。

「や…やめろって…！」

「それでは決まりですね？」

はやての隣に座っているカリムが言うと、はやての手を振りほどいたネロも

「そうだな…」

と言った。

こうして、ネロは聖王教会から機動六課に移動する事となった。
上着とコートを羽織り、世話になった聖王教会を見る。

「それじゃ、行こか？」

はやて達が車に乗る準備を終え、ネロを呼んだ。

「それではネロ、お元気で」

「体調管理をしっかりして下さいね？」

シャッハとカリムの声に立ち止まり、振り返り、

「ああ、元気でな」

ネロが車に乗り込む。
ネロを乗せると車は走りだし、聖王教会を後にした…

Ｍｉｓｓｏｎ：４　~協力~（後書き）

何か…ネロがかなり嫌な奴ですね…

それと、はやてとシグナムのファンの方々ごめんなさい。

感想待ってます。

Ｍｉｓｓｏｎ：５　～調査～（前書き）

ＤＭＣ　Ｄｅｖｉｌ　Ｍａｙ　Ｃｒｙ…皆さんは購入しますか？

自分はＤＭＣよりもＨＤコレクションの方を買おうかなと思ってますね。

ＤＭＣの方も考えてますけどね…

Mission：5 ~調査~

ネロの身柄は聖王教会から機動六課の方で預かる事になり、フェイトの運転する車で機動六課の部隊舎に向かっていた。
だが、車の中では、先程からネロの隣に座っているシグナムが目を瞑ったまま腕を組み、沈黙を貫いている。

「…それで俺はこれから何をすればいいんだ？」

その空気に耐えられなくなったネロは後部座席から助手席に座っているはやてに聞いた。
人と話をするのは苦手なネロだが、車内の気まずい空気に耐えられず、仕方なく聞いたのだ。

「詳しい事は六課に着いてから話す事になっとるんやけど…あっ！取り敢えず、着くまでにこの資料に目ェ通しといてください」

はやてが浮かび上がった画面を指で操作すると、ネロの前にも同じ様な画面が出て来た。

「こいつは？」

「日付ごとにまとめたアン…悪魔の画像データです。指で触れば画像が拡大出てきますんで、取り敢えず見てください」

言われた通りに試しに手近な画像を指で触ると画像が拡大する。

「（スケアクロウが多いな。こっちには…アサルトもいるか…）」

フォルトゥナでネロが出会った悪魔もいれば、書物でしか見た事の無い悪魔もいた。
表示された画像を順番に見て、画像が切り替わったとき、ネロの表情が険しくなる。

「なぁ、こいつはいつぐらいに出たんだ？」

「どれですか？」

はやてがネロの方へと振り返り、ネロの指差した画像を見る。
その画像には馬の様な下半身、牛の様な頭部、左手には身の丈程もある大剣を持った悪魔が体中から巨大な炎を出して吠えている悪魔が写っていた。

「ああ…これは…」

はやての表情が暗くなる。

「これは一週間くらい前に現れた悪魔です。報告によると、街一つが全て燃え尽きて、そこの住民と救助のために出動した管理局員全員を亡くなられたみたいで…」

「一週間前か…そうか…悪いな、嫌な事聞いちまって…」

ネロが嫌な事を言わせてしまった事に謝る。

『面白い真似をする』

『２０００年前の人間界には貴様の様な奴はおらなんだ』

『奴以外にもこの様な者が…』

「（あれが”奴”だとしたら…）」

ネロはあの画像に写っていた悪魔を知っていた。

1年前、ネロが戦い魔界に追い返した”炎獄の覇者ベリアル”。もう一度現れた時には”赤の悪魔狩人”に討ち取られてしまったらしいが…

「（悪魔と異世界ミッドチルダに古代遺物か…）」

前方に何かの建物が見えてきた。

「ほら！　六課の隊舎が見えて来ましたよ！」

「はやて！窓から顔出しちゃダメだってば！！」

はやてが助手席の窓の方から顔を出して、隊舎の方を指さしていると、運転席のフェイトが慌ててはやてを引き戻す。

それを見たネロはただ苦笑するしか無かった。

……

「ささ、こっちです」

車から降りたネロははやてに連れられて機動六課の部隊長室まで案

内された。
部屋に入ると茶色の髪をサイドアップで一つに束ねた女と赤毛の髪を後ろで二つに分け、三つ編みにした少女がソファーに座って待っていた。
「おつかれ、はやてちゃん」
「お帰りはやて」
茶髪の女性と赤毛の少女がはやてに声を掛ける。
はやてとネロに続きシグナムが部屋に入るとドアが閉まる。
「初めまして、機動六課スターズ分隊隊長の高町なのはです。お話はフェイト隊長とシグナム副隊長から聞きました。宜しくお願いします」
茶髪の女…なのはが笑顔で左手を差し出してきた…
ネロはそれに応えようとしないが、隣のはやてとシグナムに肩を小突かれたので渋々手を差し出す。
「あたしはスターズ分隊副隊長のヴィータだ…」
なのはとネロが握手を交わすと赤毛の少女…ヴィータが口を開いた。
笑顔のなのはとは対称的にヴィータの表情はとても不機嫌そうだった。
挨拶を終えた後もずっとネロの事を睨んでいる。
しかし、ヴィータはネロ睨みながらも握手を求めるために右手を差し出した。

「……」

ネロはそれに応えようとはしなかった。

「おい、何してんだ、早く右手だせよ」

ヴィータのその一言で部屋の空気が凍り付く。

はやて達は何も言わなかったが、困った様な顔をしていた。

沈黙の中、再びヴィータが口を開く。

「あたしは絶対にてめぇを認めねぇ！悪魔だか何だか知らねぇが、はやてを馬鹿にするような奴をあたしは絶対に認めねぇからな！！」

ヴィータが怒鳴るが、

「そうかい…こっちもお前みたいなガキに認めてもらおうなんて思ってねぇよ」

ネロも負けじと言葉を返す。

「何だと、てめぇ！！」

頭に血が上ったヴィータは立ち上がり、ネロに掴み掛かる。

「ヴィータ…それ以上やるなら、怒るで？」

はやてが静かに、しかしはっきりと言った。

「う…ごめん…はやて…」

はやてに叱られたヴィータはネロから手を離し、渋々席に着いた。
「（どっかで見たな。この光景…）」
ネロがシグナムに視線を向けると、シグナムは慌ててネロから視線を反らした。
しばらくしてフェイトが遅れて部隊長室に入って来た。
これで隊長陣が全員揃ったことになる。
「これで隊長陣は揃った事やし本題入ろか～」
はやてが手を叩きながら言うと全員がそちらを向いた。
「最近出没しているアンノウンの対策をする為、ネロさんに協力して頂く事になりました。それで、今後の任務ではネロさんにも戦闘と調査に同行して頂きますがその事については構いませんね？」
「ああ、借りはちゃんと返すよ」
ネロが面倒くさそうに言った直後、はやての前にホログラムの画面が浮かび上がり、誰かと会話をするとすぐに指示を出す。
「ネロさん、悪いけど早速なのは隊長達と出動してもらえん？」
はやてが躊躇しながら言ってきた…
「（隊長？）いきなりだな…悪魔か？」
隊長という言葉に疑問を抱きつつも聞いてみる。

「いや、2日前くらいに廃棄都市区画でかなり強力な魔力反応が感知されたんやけどな…そこから破壊されたガジェットが見つかったんよ。悪魔とは関係ないと思うんやけど…」

「（魔力反応？嫌な予感がするな…）行くよ。借りを返すのとこっちにも気になる事はあるしな…」

先程車の中で見たベリアルに酷似にた悪魔の事が気になっていたのだ。

現場に行けば何か手掛かりが掴めるかもしれない。

「ん…それじゃあ、なのは隊長とフェイト隊長はフォワード陣と出動。シグナムとヴィータは今回は待機や」

「「了解！」」

なのはとフェイトが返事をする。

「わかりました」

「わかった」

続いてシグナムとヴィータも返事をする。

ネロがなのはとフェイトと部隊長室を出ると、ヘリが待機している屋上へと向かう途中で気になっていた事を聞いてみた。

「なぁ、これから出るメンバーにフォワード陣とかなんとかってのが聞こえたんだけど…」

「ああ、私達の後輩でなのはの教え子の事ですね」

フェイトが答える。

「教え子？」

「そう、私、魔法戦技の教導管なんですけど、機動六課に配属された新人を鍛えてるんです」

「みんなまだ甘い所だらけですけど、飲み込みは早いし、実力も結構付いてきてますよ」

「この前、ちょっと揉め事を起こしたりもしたんですが…」

なのはの最後の言葉をスルーして次の質問をする。

「何でヴィータって奴、俺がはやてを馬鹿にした事知ってたんだよ。教会にはあいつ居なかったよな？」

「ああ…それは念話を使って話したんです」

「念話？」

ネロが聞き返す。

「思念通話と言って、直接相手の頭に念じて話す事です。解りやすく言うとテレパシーみたいなものと言えばいいでしょうか…」

「（魔法があればなんでもありなんだな…）」
と思ったが人が空を飛び回って、炎を纏った剣を振り回したりする連中のいる世界だ。
テレパシーくらい使えてもおかしくはないと納得する。
「筒抜けって事かよ…ってことは…アイツの前じゃあまり失礼な事は言えないな…」
と呟いた。
……
屋上のドアを開けると、ドアを開けると、ヘリの前に人が４人立っていた。
その４人はなのはとフェイトを待っていたのだろう。
なのはとフェイトを見ると敬礼し、２人に続いてヘリに乗り込んだ。
４人ともまだ若く、オレンジの髪を二つに束ねた少女と青い髪にショートカットの少女はネロと同い年か１つ下くらいだったが、後の２人は明らかに年下だった。
「（教え子って言ってもまだ子供か…）」
ヴィータより同い年くらいの赤髪の少年とピンク髪の少女がこっちを見ている。
時々なのは達の方を見ていた事から、念話とやらで話して何かを確

認しているのだろう。

「みんな、この人はアンノウン事件に協力して頂くネロさんです。今日から六課の一員として動いて頂くからみんな順番に挨拶して」

なのはが説明を終えると、４人は端から順番に挨拶を始めた。

「初めましてティアナ・ランスター二等陸士です。この度はよろしくお願いします」

「同じく、スバル・ナカジマ二等陸士です！よろしくお願いします！！」

オレンジ髪の少女…ティアナがネロに挨拶すると、隣の青い髪の少女…スバルも挨拶をした。

「エリオ・モンディアル三等陸士であります！よろしくお願いします！」

「えっと…キャロ・ル・ルシエ三等陸士であります。こっちは飛竜のフリードリヒです」

ピンクの髪の少女…キャロが挨拶をすると、キャロが抱きかかえていた白い生き物…フリードが「キュクル～」と鳴いた。

４人の挨拶が終わると、なのはとフェイトがネロの方に視線を向けている。

自分も自己紹介をしろという事なのだろう。

人に対してロクに自己紹介などした事無いネロは…

「ネロだ」

最低限の挨拶だけして、ヘリの席に座った。
４人とも立ったまま座ろうとしなかった。
おそらくネロがまだ何かを話すと思っているのだろうが、協調性・社交性ともほぼゼロに等しい彼はそれ以上話さなかった…

「えっと…それじゃあ今回の任務なんだけど、内容は先程発生した魔力反応の発生地点の調査になります」

「現場には破壊されたガジェットも確認されてるから、気を付けてね。あと、みんな座っていいんだよ？」

フェイトが促す事でみんな座るが、ネロは窓から外を眺めていた。

ヘリは廃棄都市区画に着陸し、なのは達はヘリから降りた。

最後に降りようとしたネロは右腕がしくしくと疼いている事で足を止めた。

「（この感じ…）」

立ち止まっているネロを見たエリオとキャロが何を思ったのか小走りでネロの方に戻ってきた。

「ネロさん！」

「あ？」

不意にエリオから話しかけられ、取り敢えず返事をする。

「あの…ネロさんは次元漂流者…なんですよね？」

「らしいな…」

エリオからの問いを最低限の返事で返す。

「あの…私達みんなネロさんの味方ですから、気軽に話してくださいね？」

おそらくヘリの中でネロが一言も話さなかった事を気に掛けているのだろう。

「そんな事より、やる事があんだろ？俺と何かと話してていいのか？アイツ等、お前等の事呼んでるぜ？」

なのは達『スターズ』とフェイトがエリオ達を呼んでいた。

「早く行ってやれよ。怒られるぜ？」

「ですが…ネロさん…」

エリオが言い終わる前にそれを溜め息で遮った。

「エリオとキャロだったか？呼び捨てでいいし、そんな風に話さないでくれよ。調子が狂う」

「ですが…」

キャロが何かを言いかけるが、
「お前等、気軽に話せって言ったよな？だったら、まずその敬語をやめろ」
「え…？」
「お前等がそんな風に話すとこっちも調子が狂って話せないんだよ」
そう言い残してなのは達の方へ歩いて行く。
エリオとキャロもネロに着いて行った。
なのは達は強力な魔力反応が感知されたと思われる地点にいた。
爆発した跡…と言うより軽い隕石が堕ちた様な場所に全員が集まる。
「ここがそうだね…　それじゃあ2人1組に別れて調査始めようか。スバルとティアナは向こうのガジェットの残骸をお願い。エリオとキャロは向こうの廃ビルとその近くのガジェットをお願いね。私達はこの辺りを調べるから」
なのはが指示を出し、フォワードの4人は調査を始める。
ネロはクレーターの中心…に落ちていたボロ布を右手で掴む。
その様子をなのはとフェイトが黙って見ていたが、ネロが突然立ち上がり、持っていたボロ布をなのは達に見せた。
「当たりだな」
「え？」

「この布…　元は悪魔だったものだよ。つまり悪魔の死体みたいな物だ」

悪魔に関する知識がない2人に手短に悪魔の情報を教える。

「それが悪魔だったって事ですか？」

フェイトが聞き返す。

「悪魔の中には人間界に来る為に何かしらの媒介を使うものもいるんだよ。形のある物に憑依したりとかな…自分の身体を持つ悪魔もいるが、滅多な事が無い限りは出てこないな」

「あの破壊されたガジェットはその悪魔の持っていたレリックを奪いに来た所で戦闘になって、残った他のガジェットが回収したか…誰かがガジェットと悪魔を倒してレリックを持って行った…て事かな？」

ネロの言葉を引き継いでなのはが問う。

「まぁ、何かがあったのは間違いないな」

ボロ布を捨て、クレーターから這い上がる。
ネロは当たりを見回し、炎によって出来た焦げ痕を探した。
ベリアルに酷似した悪魔はここには現れていないだろうが、確認してみる必要はある。

「（やっぱりここには来てない…）」

その考えを右腕の疼きが止めた。
その疼きと同時に遠くのビルから爆発が起こった。
「あの方角は…！」
ネロが走り出す。
「ネロ！？」
突然走り出したネロをフェイトが呼び止める。
「悪魔だ！」
立ち止まりながら手短に状況を告げる。
「「え！？」」
ネロの言葉になのはとフェイトの表情が険しくなる。
「俺はあっちのビルの方へ行く！お前等は向こうの方に調査に行った奴らの方に行け！」
「でもネロ1人じゃ…」
「早く行け！！」
そう言うと同時にネロは爆発のあったビルの方へと向かって行ってしまっていた。
「ネロ…」

「フェイトちゃん！」

「あ…うん！」

2人はバリアジャケットを纏い、空に飛び上がった。

「あいつら…」

悪魔が現れた事もそうだが、ネロはエリオとキャロ2人の事の方が気掛かりだった。

何故あの2人の事をそんなに気に掛けるのかは解らなかったが、

『あの…ネロさんは次元漂流者…なんですよね？』

『あの…私達みんなネロさんの味方ですから、気軽に話してくださいね？』

一時とはいえ、自分の事を気に賭けてくれた2人の子供を悪魔の脅威から守ってやりたいと思ったのだった。

Ｍｉｓｓｏｎ：５　～調査～（後書き）

ネロはキリエ一筋なので、六課メンバーとの恋愛は多分無いかもしれませんね…

感想お待ちしております！！

Ｍｉｓｓｏｎ：６　～戦闘～

廃棄都市区画の廃ビルで調査をしていたエリオとキャロにフェイトからの念話が入る。

『エリオ、キャロ！聞こえてる？』

「フェイトさん？はい、聞こえてます！」

フェイトから念話が入ってきたのにキャロが返事を返すと、エリオにも念話が入ってきた事からキャロの方を振り向く。
だがキャロを見たときのエリオの顔には焦りの色が浮かんでいた。

「くっ！」

『Ｓｏｎｉｃ　Ｍｏｖｅ』

エリオが叫んだ瞬間に彼の腕時計型デバイス…ストラーダから電子音が鳴り響くと同時にエリオは瞬時にキャロを抱えて距離を取る。

「エリオ君！？」

キャロはエリオの行動に驚いていたが、エリオは自分の正面にいる”奴ら”を睨み付けていた。
キャロもエリオの目線の先を見ると、大量のスケアクロウとボロボロのマントを着て大鎌を持った悪魔…ヘル＝プライドがエリオ達の方へと歩み寄っていた。

「ありがとう、エリオ君…」

助けられなければ、自分は今頃正面の悪魔共の餌食になっていただろう。エリオはキャロを庇う様な形で悪魔共と対峙していた…

『エリオ、キャロ！？どうしたの！？』

フェイトの焦っている声が念話によって2人に届く。

「フェイトさん…アンノウンに遭遇しました。　報告の中にもあった個体です」

フェイトから入ってきた念話を返すと右腕の腕時計型のアームドデバイス…ストラーダが再び電子音を発する。

『Ｓｅｔ　Ｕｐ』

エリオの体が光に包まれると、陸士服から赤いジャケットに白いロングコートのバリアジャケット…両手には腕時計から槍の形に変わったストラーダがあった。

「ケリュケイオン！」

『Ｓｔａｎｄ　Ｂｙ　Ｒｅａｄｙ　Ｓｅｔ　Ｕｐ』

キャロも自分の二つの宝石に翼の付いた手首飾り型のブースとデバイス…ケリュケイオンを起動させ、ピンク色の服に白いローブと帽子を被ったバリアジャケットを纏う。
同時にケリュケイオンも手の甲に丸いクリスタルを付けたグローブの形に変わっていた。

「エ…エリオ君…」

キャロは震えながら隣にいるエリオに声をかける。

「大丈夫だよ。ガジェット以外のアンノウンと戦うのは初めてだけど…僕が絶対にキャロを守るから！」

エリオがストラーダを構える。

……

「ここか！？」

右腕の疼きを感じながら爆発があったビルの入り口からビルの中に入るネロだったが、ビルの中の状況を見て絶句する。

ビルの中…広場や階段には大量のスケアクロウ及びヘル＝プライドが不快な笑い声をあげて暴れていた。

「……」

ネロの頭にズタズタに斬り裂かれ、血塗れにエリオとキャロの姿が浮かんだ。

「あいつら…まさか…」

ネロの呟きを聞いた大量の悪魔が一斉にネロの方を向いた。

悪魔達が向かって来るよりも早くネロは走りながら一気に前方に飛んだ。

「うおおおおっ！！」

走った勢いをそのままに、空中で両足を揃え、ブーツの底を前方の悪魔に叩き付ける。
衝撃で悪魔が後方に飛ばされ、後ろの悪魔達を巻き込んで転倒する。
武器で追撃をしたい所だが、レッドクィーンもブルーローズも管理局に押収されてしまった。
悪魔の右腕を使いたい所だが、エリオとキャロがいるかもしれないこの状況で、使うのは好ましくない。
ネロに残された手段は悪魔の持っている武器を使うしかなかった。
転倒しているヘル＝プライドの大鎌を引ったくり、左腕で持ち、向かってくる悪魔を斬り裂く。

「ハッ！」

起き上がり向かってくる悪魔達を大鎌で斬り付けながら、階段を昇る。
斬っても斬っても減らない悪魔を斬り裂くネロの感情は焦りに支配されていた。

……

エリオがストラーダを構え、突っ込んで行く。それを見た最後の一体であるヘル＝プライドも鎌を大きく振りかぶるがモーションが大きく、降り下ろすよりも前にエリオのストラーダが悪魔の体を貫いた。
ヘル＝プライドの体は元の“塵”に戻った。

「非殺生設定のはずなのにどうして…」

エリオが声を漏らしながら言うと悪魔だった塵を手に取る。

キャロも悪魔を全て殲滅した事で安心してエリオの元に駆け寄る。
『先程の2種類のアンノウンは目撃例が最も多いタイプです。しかし、戦闘を行ったとの記録はありません』
ケリュケイオンの報告を聞いたキャロが首を傾げる。
「非殺生設定で倒せるって事はガジェットみたいに生き物じゃないの事かな…？」
「わからない…　それより早くフェイトさん達と合流しよう。ここはまだ危ないから…」
エリオがキャロの手を引いて歩き出そうとした時…
「え！？」
「魔法陣？」
エリオ達の足下がぼんやりと光り始めたのだ。
それはミッド式でもベルカ式でもない魔法陣だった。
「キャロ！」
エリオがキャロを抱えて魔法陣から距離を取る。
魔法陣から現れたのはエリオ達が見た事の無いトカゲの様な姿をした悪魔だった。
二本足で立ち、兜の様な物を被り、右腕には丸い盾の様な物を装着していた。
悪魔との戦闘経験が全く無いエリオとキャロはその悪魔を見てすぐ

に悟った。
さっき戦った悪魔とは比べ物にならない位強い悪魔だと…

「キャロ下がって！」

キャロを地面に降ろしたエリオはストラーダを構えてトカゲに突っ込んだ。
しかし、先程戦った悪魔に通用した突きは簡単にトカゲの盾に阻まれた。

「なっ！？」

動揺するエリオにトカゲの鋭利な爪が迫る。

「くっ！」

エリオがソニックムーブを使ってトカゲから距離を取る。
トカゲの方に視線を向けると、トカゲは先程までエリオがいた場所に爪を突き立てていた。

「エリオ君…どうしよう…？」

キャロが目に涙を浮かべてエリオに声をかける。

「キャロ…フェイトさんに連絡して応援に来てもらって！」

「うん…」

キャロが念話でフェイトに連絡を取っているのを確認したエリオは再びストラーダを構え、トカゲとの戦闘に戻る。

「ハッ！」

エリオが素早い動きでトカゲを翻弄し、トカゲの攻撃を誘う。
エリオの思惑通り、トカゲは左腕を振り上げた。

「今だ！」

両腕を振り上げた事でガラ空きになった胴の左側に一撃を入れようとストラーダを突き出すが…

「え！？」

ストラーダはトカゲの右腕の盾で防がれたのだ。
同時に左腕でストラーダを掴まれる。

「しまった…！？」

ストラーダを掴んだトカゲはストラーダごとエリオを振り回し、近くの壁に激突させる。

「がはっ！」

壁に叩き付けられたエリオは地面へと倒れる。

「エリオ君！！」

それを見たキャロが悲痛な叫びをあげる。

キャロが抱えていたフリードが唸り、トカゲに向けて火球を吐くが、

トカゲの皮膚の表面を焦がしただけに終わる。

「ぐっ……うぅ……」

トカゲはエリオに一歩、また一歩と近付いて行く。

遂にエリオの目の前にまで接近したトカゲは地面に伏しているエリオに向けて左腕を振り上げた。

エリオが自分の死を覚悟した時…

「うおおおっ！！」

聞き覚えのある声がして、トカゲが横から現れた黒い影によって吹き飛ばされる。

「え…！？」

エリオが顔を上げると、肩で息をしているネロが立っていた。

「ネロさん…」

エリオがネロの名前を呼ぶ。

「……何とか間に合ったみたいだな」

言いながら、ネロがエリオを立ち上がらせる。

「おい、お前等、後ろでじっとしてろ」

ネロはそれだけ言うと、吹き飛ばしたトカゲ…アサルトの方を向く。
エリオとキャロはそれをネロの後ろから見守る。

「Ｃ'ｍｏｎ！」

ネロが左手で手招きをして挑発する。
それを見たアサルトは耳を覆いたくなる様な咆哮をあげる。
エリオとキャロが思わず両手で耳を塞ぐ。

ネロが咆哮をあげているアサルトに向かって行く。
アサルトは先程エリオにやったように左腕の爪をネロに振り下ろす。
その左腕を包帯とグローブで保護された右腕で掴み上げるネロ。

「せめて、爪の手入れぐらいはしとけよ…」

呟き、アサルトの左腕を右腕で普通ならあり得ない方向へと曲げる。
同時に嫌な音がアサルトの左腕から鳴り響く。
腕を折られたアサルトが絶叫する。
左腕を離したネロは、アサルトの腰から伸びている尻尾の様な物を右腕で掴む。

「Ｄａｉ！（死ね！）」

右腕で掴んだアサルトを振り回し、何度も地面に叩き付ける。最後に思い切り地面に叩き付けられたアサルトの兜はバラバラになり、露出した頭からは白濁色の液体が噴き出していた。
おそらく何度も地面に叩き付けられた事で頭蓋骨が割れたのだろう。
しかし、まだアサルトは身体を振るわせ、起き上がろうとしていたが、ネロが悪魔から奪った大鎌によって頭を跳ね飛ばされ、身体は地面に吸い込まれる様にして消えていった。

「おい、歩けるか？」

ネロが顔に付いた悪魔の体液を拭いながら聞く。

「あ…はい」

「何とか…」

2人とも先程のネロの戦いを見てうまく言葉が出せずにいた。
空を飛んでいるフリードはネロを見て警戒していた。

「なら、早くここから出て、アイツ等と合流するぞ。ここの悪魔は全滅させたから、しばらくは出てこないはずだけどな」

「悪魔…？」

ネロの言葉を聞いたキャロが聞き返す。

「お前等で言うアンノウンって奴の事だよ」

「ネロさんはアンノウンの事を知ってるから…だからあんなに戦えたんですか？」

エリオが続けて質問する。

「詳しい事はお前等の隊長にでも聞け。それより、走れるなら早くここから出るぞ」

「「は…はい！」」

そう言ってネロ達はビルの階段を降り始めた。

……

同時刻、ミッドチルダの首都クラナガンの付近にある森に1人の銀髪の男が立っていた。
銀髪の男は赤いレザーコートを羽織り、肩には黒いギターケースを担いでいた。

「森か…俺は”坊や”を捜して港の倉庫にいたはずなんだが…」

男は頭を掻きながら呟くが、すぐに表情が険しくなる。

「”坊や”はいないみたいだが…おかしな”奴ら”がいるみたいだ！」

腰のホルスターから白と黒の二挺の大口径銃を抜き、正面の茂みに向かって発砲する。
凄まじい速度で発射された弾丸は茂みに隠れていたカプセル型のロボット…ガジェット・ドローンを撃ち抜いた。

「ロボットか？おいおい、ロボットってのはもう少し頑丈なモンだと思ってたんだけどな…」

軽口をたたく男の周りを無数のガジェットが取り囲んでいた。
しかしその男はその状況を楽しむかの様に両手の双銃を構える。

「まぁ、ぶっ壊すのが楽で助かるけどな！！」

両手に構えた双銃から発射された無数の弾丸が次々とガジェットを撃ち抜いていく。
撃ち抜かれたガジェットは次々と爆発していくが、次々と現れ、男に襲いかかる。

「いくらでも補充があるってか？なら…今からロボットショーと洒落込もうぜ！」

この時、次々と壊れて行くガジェットが男の運命を大きく動かす事になるとは男は知る由もなかった。

Ｍｉｓｓｏｎ：６　～戦闘～（後書き）

難しいですね、戦闘描写は…

感想待ってます。

Ｍｉｓｓｏｎ：７　～闇魔刀解放～

ビルから出てなのは達と合流すべく、エリオとキャロと共に走っていたネロは妙な違和感を感じて足を止めた。

「ネロさん？」

「どうしたんですか？」

急に立ち止まったネロを見たエリオ達が話しかけてきた。

「おい、お前等だけでアイツ等と合流できるか？」

「え！？」

「どういうことですか？」

「お前等だけでアイツ等と合流できるかって聞いてんだよ」

ネロが焦りながら言う。

「えっと……多分」

「でもネロさんは…？」

「俺はこれから別行動だ。この先から妙な違和感を感じるからな…」

ネロが目の前の路地を見ながら言う。

本当なら説明するのが面倒なのだが、理由を言わなければ、この２

人は付いてきてしまうだろう。
この先には2人を連れてきてしまってはならないと感じたのだ。
「でも…ネロさん1人じゃ…」
「僕たちも行きま…」
「お前等は来んな。はっきり言って邪魔だ」
そう言ってから少しだけ後悔した。
案の定、2人は悲しそうな表情を浮かべ、俯いていた。
こういう事を言われた事が無いのだろう。
子供相手でも突拍子も無くこういう事を言ってしまうのがネロの悪い癖だった。
その事をキリエにたしなめられたことが何度か合った。
「……早くなのは達と合流しろ。その後でこっちに来い。いいな？」
2人が何かを言う前にネロは走り出した。
「すぐにそっちに行きます！」
「待っていてください！」
後ろから2人の声が聞こえた。
振り返らないまま、左手を挙げて答える。
……

『やはり1人で来たのか。ネロ』

エリオ達と別れ、1人で路地を走っていると不意に聞こえた低い男の声に足を止める。

「……ッ！？」

声のした方向を見ると、黒色の小型のボール状の機械が浮いていた。

『まさかとは思ったが、本当に1人で来るとはね…他の……』

機械からの音声が全てを言い終わる前にネロは機械を蹴り飛ばした。蹴り飛ばされた機械は近くのビルの壁に激突し、壊れた。

「あの声…」

ネロはその声に聞き覚えがあった。

「間違いない。俺に悪魔討伐を依頼してきた奴の声だ」

『その通りだよ』

再び響いた声に驚き、先程蹴り飛ばした機械を見るが、機械は壁にめり込んだまま、黒煙を上げていた。

『こっちだよ』

声のする方を見ると、先程壊した機械と同じ機械が浮いていた。

『まだ話が終わっていないのに…短気な人なんだね。君は…』

「誰だてめぇは…？」

『そんな事より…』

男の声が一旦途切れる。

『何故君は1人で来たのかな？』

「あ？」

『さっき一緒に居た子供達を巻き込みたくなかったのか…それとも1人でここに来ないと”右腕”が使えないからかな？』

その一言に思わず右手を背中の方に回した。

『その様子だと右腕を使えないから、1人で来たようだね』

「…言いたい事があるならさっさと言えよ」

『おや？何故そんな事を言うのかな？』

男を無視してネロは思っている疑問をぶつける。

「…今出てきてる悪魔もお前の仕業か？」

『そうだよ。局の魔導師共が　悪魔相手（アイツ等）にどこまで戦えるかを見たくてね』

男の声が不敵に答える。

「……」

『まぁ、本命は君だけどね』

「何？」

『僕が召喚させた悪魔を一撃で確実に仕留める。”あの男”に似てきたねぇ』

「あの男？」

ネロは自分を救ってくれた男の事を思い浮かべた。

『まぁそれはさて置き、僕の元に来る気は無いかな？君の力を貸して欲しいんだ』

「何だと…？」

ネロの表情が険しくなる。
くだらない事をごちゃごちゃ言う奴だと思っていたが、ここまで馬鹿げた事を言うとは思っていなかった。
これ以上この男と話をする必要は無い。
そう思いながら右腕を振り上げた…

『待ちなよ。これは君にとってもいい話なんだよ？』

その一言でネロの動きが止まった。

「どういう事だ？」

拳を降ろしながら男の声に問う。

『君は局の奴らをどう思ってる？』

突然投げかけられた質問を思わず考えてしまう。

『奴らは君を助け保護したよね？でもそれは誰のためかな？』

「……」

『自分達の都合のためだよ。現れる悪魔を倒すために君を利用しているんだよ。その証拠に君の武器は没収されている。君が反抗できない様にね…。それに、奴らだって犯罪に近しい行為もしている…』

「……」

『でも僕は違う。君の戦うための力ならいくらでも与えるし、君の望む事ならいくらでも叶えてあげるつもりだ。だから手伝ってくれないか？　悪魔（管理局）を倒すのを…』

確かに管理局はネロを悪魔を討伐するために利用しているのかもしれない。

しかし、それならばネロが倒れた際に病室ではなく薄暗い地下室の牢の中にでも放り込めばいいし、わざわざ本人を助けた人間達の所へ送る必要も無い。

仮に本当にネロを利用しているとしてもネロは男に協力するつもりは無かった。

『さて、ここまで話をして来たけど…君の答えはどうかな？僕に協力するのか…それとも、　悪魔（管理局）に協力するのか…』

「……悪いが、お前みたいな奴に協力するつもりはねぇよ。お前の言ってる事が正しいとしてもな。それに…」

ネロが右腕を振り上げる。

「俺は別に管理局（アイツ等）　の側に付いたつもりはねぇ！！」

叫びながら右手で目の前の機械を思い切り殴りつけた。
殴られた機械は思い切り吹っ飛び、ネロの目の前のビルに激突した。
しかし先程と同じ様に再び同じ機械がネロの目の前に現れる。

『そうか…少し楽観的すぎたのかな、僕は……なら仕方ないね』

男の声と同時に不意に足下から現れた金色の閃光がネロを襲う。
先程から右腕の疼きで悪魔が周囲に居る事はわかっていたのだが、
男の相手をしていて完全に油断していた。

「がぁっ！？」

突然の攻撃をまともに受けたネロは吹き飛ばされ、前方のビルの中に突っ込んだ。

「ぐっ……」

痛みを感じながら立ち上がり、周囲を見ると、部屋の入り口や窓を塞ぐ様に赤い根が張った様な壁が広がる。

「結界かよ…面倒だな…」

突然、ネロの周囲に稲妻が走った。

「こいつは……」

ネロは稲妻の正体を知っていた。
フォルトゥナに居た時に何度か相手をした事のある相手だ。
ネロは稲妻の様子を黙って眺めながら右腕の包帯とグローブを取り、コートのポケットに仕舞った。
右腕の疼きが強くなっているのを感じた。
そして数度の落雷の後、ネロの背後に落雷した時、ネロはその気配をしっかりと捕らえた。

「……よりによってお前か」

ネロが溜め息を吐いた。

『君の力…見せてもらうよ。この悪魔…ブリッツを使ってね』

ネロのいる室内に先程の男の声が響く。
同時にブリッツがネロに向かって突進し爪を振り上げた。

「チッ！」

ブリッツの攻撃を後方に跳んで交わす。
ブリッツの身体は雷が帯電しており、接近戦を仕掛けると、雷に感電し、ダメージを受けてしまう。
本来は銃などの遠距離武器で雷を剥がし、弱った所へ一気に接近戦

を仕掛けるのが定石なのだが、今のネロにその戦法は使えなかった。

「ハァッ！！」

試しに右腕でブリッツを殴りつける。
しかし、殴りつけた瞬間、右腕を通じて電流がネロの身体を走り抜ける。

「がっ！？」

以前戦ったときと同じ様に、剣でも右腕でも、雷が帯電しているブリッツには近距離攻撃は通じないようだ。

「だったら…やり方を変えるか！」

ネロは右腕に意識を集中させる。
得体の知れない奴に監視されている中、この力を使うのは好ましくなかったが、今はそんな事を言っている場合ではない。
右腕を中心にネロの身体が青白い光に包まれる。
光が消えると、ネロの右手には青白い光を発している日本刀が握られていた。

ー闇魔刀ー

ネロの切り札にして、1年前、命の恩人から託された魂。
しかし、現れたのはそれだけではなかった。
ネロが闇魔刀を持つと、ネロの身体はお味ロイ光に包まれ、背後に青白い悪魔が現れるのだ。
闇魔刀を託され、1年間その悪魔と共に戦ってきたが、悪魔の正体が何なのかは未だに解っていなかった。

解っているのは、ネロが闇魔刀の力を解放すると現れ、ネロの攻撃に合わせて共に攻撃をするという事と、力を解放すると声にエコーがかかるという事だけだった。
しかし、ネロにとってそんな事はどうでもよかった。
重要なのはその力が悪魔を討伐できるという事だけだ。

闇魔刀を左手に持ち替え、構える。

「「喰らえ！！」」

ブリッツに向けて闇魔刀を鞘から抜刀する。
同時に背後の悪魔も左腕から刀を抜刀する。
抜刀した際に現れた2重の青白い衝撃波がブリッツに向かって行く。
衝撃波は両方ともブリッツに直撃するが、全身を覆う雷の鎧はまだ剥がれていなかった。
それを見たネロは再び闇魔刀を使って、背後の悪魔と共に、衝撃波をブリッツにぶつける。
それでも雷は剥がれない。
3度目の衝撃波を受けたブリッツは身体を震わせ、自らの身体を雷光に変じさせた。

「「やっぱりそうか……なら…」」

ネロは目を閉じ、右腕に意識を集中させた。
右腕の疼きのおかげでブリッツの位置は筒抜けだった。

「「そこだ！」」

ネロの斜め上を移動していたブリッツに向けて衝撃波を飛ばす。
衝撃波が命中したブリッツは叫び声を上げながら姿を現し、床に転

がった。
床に転がったブリッツの身体には先程まで纏っていた雷は消えており、バテた様に息を荒げていた。
「「今なら行けるなっ！！」」
ネロは走りながら、右腕で闇魔刀を吸収しブリッツに接近する。
「オラァ！！」
右腕でブリッツの顔を思い切り掴み、強引に起き上がらせる。
上体を起こしたブリッツに右腕、左腕でパンチ、時折右足でのキックを混ぜながらブリッツに凄まじいラッシュを掛けていく。
「Ｂｒｅａｋ！（壊れろ！）」
フィニッシュにブリッツの顎先にに右腕を思い切り打ち付ける。
顎先を思い切り殴られたブリッツは天井に頭から突っ込んだ。
しかし、体重が重いのか、ミシミシと音を立てその身体を振るわせる。
しばらく放っておけば、床に落下するだろう。
しかし、その状態をネロが放っておくはずが無い。
ネロは再び闇魔刀を出現させ、左手で構え、腰を落とす。
同時に重力に引っ張られたブリッツが床へと落下を始める。
「「Ｙｏｕ'ｒｅ　ｇｏｉｎｇ　ｄｏｗｎ！！（あの世へ行きな…！！）」」

闇魔刀をブリッツが床に落ちる前に抜刀する。
抜刀の一閃がブリッツの無防備な身体を斬り裂く。

「「うおおおおおっ！！」」

返す刀で続けざまにブリッツに闇魔刀での攻撃を繰り出す。

「「Ｄｕｓｔ　ｔｏ　Ｄｕｓｔ…（塵は塵に…）」」

最後の一撃がヒットしたブリッツは壁に激突し、倒れる。

同時にネロの右手に握られた闇魔刀が右腕に吸収させる。
闇魔刀と背後の悪魔の力は強力な代物だが、無制限に使用できる物ではない。
魔力の限界が近付くと、強制的にその力を終了してしまうのだ。

「もう　終わりか？」

ネロが挑発すると起き上がったブリッツは身体を大きく仰け反らせ、大音量の咆哮を上げる。
同時に身体を赤い雷が覆う。

「予想通りだな」

ブリッツは赤い稲妻へと姿を変え、ネロ目掛けて突進してきた。
ネロはそれを跳躍してかわすが、ブリッツは軌道を修正して、再びネロを狙う。

「Ａｉｅ　ｈｉｋｅ！（エアハイク！）」

右腕に意識を集中させ、ミッド式でもベルカ式でもないデザインの青い魔法陣を形成し、両足でそれを踏みつけ、さらに跳躍し、ブリッツの攻撃を回避する。

「ふぅ…」

床に着地したネロは溜め息を吐く。

『やはり素晴らしいね。君の力は』

突然部屋に男の声が響く。

「てめぇ…！」

ネロが低く唸る。

『やはり、君の力…あの男が欲しがるわけだ』

「何だと！？」

ネロの問いを無視して男は別れの言葉を述べる。

『今回はこれで退散するよ。仕事も溜まってるしね』

「待て！」

そこまで言ったネロの身体が突然何者かに捕らえられた。

ネロを捕らえたのは先程赤く変色した雷を纏ったブリッツだった。

「おああああっ！！！！！」

男との会話の所為ですっかりその存在を忘れていた。
ブリッツを振りほどこうとするが、電流が走っている所為で身体が痺れ、身体を動かす事が出来ない。
闇魔刀を解放させ、強引に抜け出したいが、先程の一撃の所為で魔力を使い切ってしまった。
赤く変色したブリッツがその後取る行動はただ一つ。
ネロを捕らえたまま、ブリッツが呻き声を上げ、身体を振るわせる。

「（くそ……抜け出す方法がねぇ……！）」

ネロの努力も虚しく稲妻の悪魔はネロを捕らえたまま爆発した。

Ｍｉｓｓｏｎ：７　～闇魔刀解放～（後書き）

何かネロのキャラが崩壊している様な……

感想お待ちしています。

Mission：8 ~傷心~（前書き）

今回は前回の戦闘の裏話の様な感じになっています。

Mission：8 ~傷心~

ネロと別れたエリオとキャロはフェイト達と合流するために行動を起こしていた。

「フリード！」

「キュク～」

キャロが胸の前で腕を交差させると、彼女のブーストデバイス『ケリュケイオン』から光が放たれ、足元には正方形の端に円が取り付いたピンク色の魔方陣が広がり、キャロを中心にゆっくり回転し始める。

「基は清き奔る白き閃光…　我が翼となり、天を翔る…」

光の強さが増して行き、同時にフリードも光に包まれる。

「来よ、我が竜フリードリヒ！竜魂召喚！！」

キャロが詠唱を終えると、光の中から巨大な白竜が現れた。
キャロの詠唱により、フリードが巨大化したのだ。
姿形は小さかったフリードが巨大化した様な感じだが、頭部は先程の愛らしい形ではなく、凶暴な竜の様な姿に変わっていた。

「エリオ君！乗って！」

「うん！」

エリオがフリードの背中に跨がる。

「行こう！」

キャロがフリードの手綱を引くと、フリードが前進する。

……

「バルディッシュ！」

足元に金色の魔法陣を展開させ、フェイトの周囲に電撃が走り出すと彼女のデバイス『バルディッシュ・アサルト』のリボルバーが高速回転の後にコッキングを行う。

「フォトン・ランサー！！」

フェイトが構えたバルディッシュから数１０発の魔力弾を空中の下級悪魔へと放つ。

「バルディッシュ、後、どの位？」

フェイトの問いにバルディッシュが電子音で返事をする。

『数は不明、依然として出現し続けています』

その返事を聞いたフェイトの表情が曇る。

遠くの方に目を向けると、なのはが下級悪魔を魔力砲で撃ち抜いているのが見えた。

『なのは、大丈夫？』

『今はまだ大丈夫だけど、このまま戦闘を続けてたら私達もフォワードのみんなもキツくなる…』

なのはが念話を返しながらフェイトと合流する。

『なのはさん、フェイトさん！』

突然、キャロからの念話が届いた。

『キャロ？そっちは大丈夫？エリオは？』

『私達は大丈夫です。それよりも、ネロさんが……』

『え？』

『何かあったの？』

キャロの念話を聞いた2人は嫌な予感がした。

『嫌な予感がするって言ってどこかに……』

キャロがネロと交わした会話を2人に伝える。

『それじゃあ、今は一緒じゃないの？』

『はい…なのはさんと合流してから来てくれって……』

なのはの問いをエリオが返す。
「なのは、どうする？」
フェイトが問う。
「ネロの方はフェイトちゃんが行ってあげて。私はスバルとティアナの方に行くから！」
「わかった。気をつけてね！」
「うん！」
挨拶を交わし、２人は別れた。
……

「フリード、ブラストレイ！」
キャロの指示によりフリードが火球を吐き出し、下級悪魔を焼き尽くす。
それに続いてエリオもフリードの背中から後方のビルに降り立ち、黄色い正三角形のベルカ式の魔法陣を展開しストラーダを構える。
「キャロ！」
「ケリュケイオン、ブーストアップ！」

キャロのケリュケイオンが光を放ち、ストラーダの射出力を上げると、エリオが一直線に悪魔に突っ込む。

「スピーア・アングリフ！」

『Ｓｐｅｅｒ　Ａｎｇｒｉｆｆ』

「いっけぇぇぇっっーーーーー！！」

キャロのブーストにより加速を上げたストラーダの刃が無数の悪魔を塵に返すと、エリオは再びフリードの背中に飛び乗った。

「キャロ、大丈夫？」

「初めての任務の時みたいに怖かったけど、もう大丈夫だよ……」

最初の内は悪魔にうまく対処出来なかったが今の二人は徐々に冷静さを取り戻していた。

「エリオ、キャロ！」

「「フェイトさん！」」

フェイトが近付いて来るのが見えた２人の表情が明るくなる。

フェイトもエリオとキャロの無事が確認できた事で安堵の溜め息を吐いた。

「２人とも、大丈夫だった？」

「はい！」

「少し怖かったですけど…なんとか……」

「そっか…良かった。それで、ネロは？」

フェイトが思い出した様に聞く。

「こっちです！」

エリオがネロと別れた所へと案内する。

……

「ネロさんとはここで別れたんです」

3人はネロと別れた場所へと降り立つ。（フリードは小さくなった）

「この先に行ったの？」

「はい……」

フェイトが周囲を見渡すと、廃ビルの壁に黒いボール型の機械がめり込んでいるのが見えた。

「これは……？」

フェイトが壁から機械を引っ張り出す。

「何ですか？それ……」

「壊れてるみたいですけど……」

機械を見たエリオとキャロがそれぞれの感想を述べる。

「うん。でも、ここで何かがあったのは間違いないみたいだね…コレは一応回収しておいた方が……」

フェイトが最後まで言い終わらないうちに、エリオがそれを遮る。

「フェイトさん！アレ……！」

エリオが指差す先を見ると、路地の奥のビルの5階当たりの窓に赤い根の張った様な壁が現れていた。

「何…アレ……？」

キャロが怯えた様にフェイトの後ろへと下がる。

3人がしばらくそれを見守っていると、窓から青色の強い光が溢れだした。

それを見た3人はすぐに赤い壁の元へと飛翔した。

「この中にネロさんが…？」

エリオが壁の近くによってビル内を覗こうとするが、赤い壁の所為でビル内を覗く事が出来なかった。

「くっ！」

エリオがストラーダで壁を貫こうとするが、壁の強度が高い所為か、ストラーダの刃は弾かれてしまう。

「フォトン・ランサー」

エリオが下がるのと同時に、フェイトがフォトンランサーを撃つが、これも弾かれてしまう。

「ＡＭＦ？いや、違う！」

突然、壁から赤い手が現れ、フェイトとエリオに襲いかかるが、２人が後ろに下がると、手は壁の中に吸い込まれた。

『……！』

『……』

耳を澄ませると、ビル内から話し声が聞こえた。
内容までは聞き取れなかったが、おそらくネロが何かを話しているのだろう。

「ネロさん…」

「大丈夫かなぁ…」

エリオとキャロが不安そうな声を挙げる。
大丈夫だと励ましたかったフェイトだったが、うまい言葉が見つからなかった。

突然、ビル内から凄まじい爆発音が鳴り響いた。
衝撃で周囲の空気が揺れる。

「な、何……！？」

「ビルの中から……」

同時に赤い壁がガラスの様に砕け散った。
エリオとキャロをその場に待機させ、フェイトが中に入る。
黒煙で室内がよく見えなかったが、部屋の奥に人影が見えた。

「……ネロ？」

フェイトは部屋に入った瞬間絶句した。
室内の壁は何かで斬り裂いた様な跡がいくつも残り、さらに奥には巨大なクレーターが出来ており、その中心にネロが座り込んでいた。

「ネロ！」

ネロの存在に気付いたフェイトがネロに駆け寄る。
ネロに外傷は無かったが、服のあちこちが破れており、胸の辺りには大きな穴が開いていた。
どんな事をすればこんな状態になるのかと思ったが、今はそんな事を言っている場合ではなかった。

……

「ネロ……ネロ、大丈夫？」

誰かがネロの肩を掴み、優しく揺する。
目を開けると、金色の髪の女がネロを揺すっていた。
「……フェイト？」
フェイトの存在に気付いたネロが顔をフェイトの方に向ける。
「そうか……俺は悪魔と戦って……」
ネロが独り言の様に呟く。
「それで……それで……ッ！」
その後の記憶が曖昧だった。
ブリッツに捕らえられ、自爆に巻き込まれ、自爆に巻き込まれた辺りまでは覚えているのだが。
ひどい頭痛がした。
爆発の衝撃で壁に頭をぶつけたのだろう。
ネロは頭を振って意識を強引に覚醒させようとする。
「ダメだよ。無理しちゃ……」
フェイトがネロの右手を握る。
「何があったのかは解らないし、大きな怪我もしてないみたいだけど、安静にしてないとダメだよ？」
「あぁ……悪い」
視線を降ろすと右腕を出しっぱなしにしていた事に気付いた。

慌てて左手で右腕の袖を伸ばし、ポケットに手を入れ、グローブを取り出し、右手にはめる。
爆発の所為でボロボロになってしまった服だが、右腕の袖とグローブは無事で良かったと安堵する。

立ち上がり、自分が突っ込んだ窓の方をを見ると、なのはとスバル達フォワード陣が心配そうにネロを見ていた。
ここに居るという事は無事に悪魔を撃退し、合流できたのだろう。
しかし、今のネロにはその事に反応する余裕すら無かった。

「……怪我とか大丈夫なの？」

暗い表情のネロを見てなのはが心配そうに聞くが、

「……ああ」

と小さい声で答える。

「えっと、ネロさん……」

「アンノウンは……？」

スバルとティアナが気まずそうに問う。

「……倒した。見りゃわかるだろ……」

とダルそうに答える。

「あの…ネロさん」

「さっきは助けてくれてありがとうございました……」

とエリオとキャロが礼を言う。

「別に……」

と全員の質問を最低限の言葉で返した。

誰とも話したくない。

大量の悪魔の出現、自分を監視し、仲間に引き込もうとした男、ブリッツの襲撃、闇魔刀の使用、それらの出来事がネロの精神を極限まで追い詰めていた。

時空管理局、機動六課、悪魔、男の声、悪魔の右腕（デビルブリンガー）、闇魔刀。

色々なものがネロの頭に浮かんでは消えていく。

「……行くぞ」

ネロの背中はあまりにも悲しく、そして痛々しいものだった。

Mission：8 ~傷心~（後書き）

感想待ってます。

Mission：9 ～帰還～（前書き）

今回は若干短いです。

Mission：9 ～帰還～

ネロがブリッツを倒した直後から悪魔の出現が止まり、残った悪魔もなのは達が殲滅したという事をネロはヘリの中で聞いた。
なのはとフェイト、スバルとティアナが遭遇し、殲滅した悪魔の事も、ヘリのモニターで見せてもらった。
出現したのは主にスケアクロウ、ヘル＝プライドの2種類と、空中を飛び回る下級悪魔だけだった。
スバル達の方に中級悪魔であるアサルトやブリッツが出現しなかったのは不幸中の幸いだったと言えるだろう。

コートの袖とグローブで隠した右腕を左手で覆いながらネロは先程の廃ビルでの出来事を思い浮かべた。
機械を通じて接触してきた男の目的、そして悪魔をどうやって呼び寄せたのか……
しかし、ネロは別の事を気に掛けていた。
閻魔刀の使用についてだった。仕方が無かったとは言え、閻魔刀を使ってしまったのだ。

「（あの時……）」

視線を隠している右腕に向ける。
ブリッツを閻魔刀で斬り裂いた際、切れ味がいつもより上がっていた様な気がしたのだ。
そして右腕から止め処なく”力”が溢れる様な感覚。

「（何が起きてんだよ……！）」

苛立ち、右拳を強く握りしめる。

この世界に来て……というより日を重ねるごとに、閻魔刀を使う度に自分が悪魔に近付いているのではないか。
そう思うととてつもなく不安になった。
そうなった場合、機動六課の人間達はどんな反応をするのか。
自分を悪魔…アンノウンと同じ存在だと認識し、排除しようとするのか。
そして、フォルトゥナに残してきた彼女…キリエはどんな反応をするのか……

「（まぁ、考えても仕方ねぇな……その時は、その時だ）」

そう思いネロは椅子に身体を預け、目を閉じた。

……

ヘリの中を支配する気まずい沈黙の中、フェイトは先程のネロの事を思い出していた。

「（あの時のネロ……）」

廃ビルにて目を開けたネロの目が紅く染まっていた様な気がしたのだ。
奥に座っているネロを見ると、ネロは右腕を隠しつつ、目を閉じていた。
左手で右腕を力強く掴んでいた。
心無しか、その左手は震えてる様に見えた。

「（ネロ……）」

ふと、視線を自分の両手に落とす。

両手とも人の形をした手だ。しかし、ネロは違う。
彼の右腕は人ではなく、悪魔のような異形の形をしている。
おそらく、その所為で他者と距離を取っているのかもしれない。

「（私…あの時、ネロの……）」

意識を取り戻し、動揺していたネロの右手を咄嗟に掴んでしまった。
ネロをこれ以上不安にしたくない、ネロを支えてあげたい。そう思ったら身体が勝手に動いてしまっていた。

「（フェイトちゃん、どう思う？）」

「（わからないよ。でも、このままじゃいけない気がする……）」

なのはとフェイトが奥にいるネロを見つめる。

「（何があったんだろうね？）」

「（わからないけど……でも、無理に聞いても仕方ないよ。気持ちの整理ができたら話してくれるよ）」

そうは言ったが、このまま放っておけばネロは自分達との間に更なる距離を置いてしまうだろう。

「（そうなる前に自分から話を聞いてみよう）」

フェイトはそう思っていた。

……

「しっかし、本当に木しかねぇな…」
そう呟く赤いコートの男…ダンテの周りには黒煙を上げて壊れている無数のボール型のロボットが転がっていた。
「何の楽しみもありゃしねぇ……」
歩き出そうとした時、妙な違和感がダンテの足を止めた。
「そんなトコに隠れてないで出てきたらどうだ？」
ダンテが言うと、ダンテの正面の木の影から紫色の髪の少女が姿を現した。
「可愛らしいお嬢ちゃんがこんなトコまでお散歩か？」
ダンテが言葉を投げかけるが、少女は沈黙を貫いていた。
「……」
「黙りか…将来クールな姉ちゃんになりそうだな。それならこっちはこっちで聞きたい事を聞くぜ。まず、このおもちゃは嬢ちゃんのか？」
「……私はドクターに頼まれて連れて来ただけ……」
「ドクター？」
「ドクターに言われてきたの。あなたがどれくらい強いか見てきて

って……」

「ドクターねぇ……。そいつに伝えな。言いたい事があるならてめえで言いに来いってな」

「……バイバイ」

ダンテの言葉を聞いた少女は次の瞬間、紫色の光に包まれ、光が収まる頃には少女の姿は無かった。

「ロボットを連れて来たお嬢ちゃんか……」

呟きながら、ダンテは森の中を歩き始めた。ここがどこかは解らないが、適当に歩いていれば何かしらの手掛かりは見つかるだろう。

「取り敢えず、街と人をを探すか…それからだな。あれこれやるのは……」

普通の人間なら、こんな状況になれば不安に駆られて、最悪の場合、動けなくなってしまうだろう。しかし、様々な経験を積んだダンテはこの状況を楽しんでいた。最近退屈な日々が続いていたからかもしれない。

「刺激があるから人生は楽しい…だろ？」

そう呟きながら、ダンテは新たな刺激を求めて森の中を歩き出した。

……

「……ネロ」

「あ？」

六課に帰還し、ヘリから降りたネロをフェイトが呼び止めた。
ちなみに、なのはとフォワード陣は先程の戦闘の報告と、これからの対策に付いて話し合うと言って一足先に六課の隊舎に戻っていた。

「はやてが部隊長室に来るようにって……」

「はやてが？」

嫌な予感がした。何か面倒な事になりそうなそんな感じがしたのだ。
本来なら無視している所だが、一応、自分を保護してくれている人間から呼び出しだ。行かない訳にはいかなかった。それに無視したらしたでヴィータとシグナムが襲いかかってくるだろう。

「（クレドに呼び出された時を思い出すな……）」

クレドも任務を伝える際にネロをよく呼び出した。
あの頃は面倒だと思いながらもクレドの元に足を運んだものだ。
さすがに襲いかかって来る奴はいなかったが……

「（まぁ、グッドタイミングってやつだな。言いたい事もあったしな……）」

「ネロ？」

ずっと黙っているネロを見て不思議に思ったフェイトがネロに声を掛ける。

「何だ？」

「あ……えっと……大丈夫？」

フェイトが心配そうな表情をネロに向ける。
何故そんな事を聞くのかは解らなかったが、

「別に……」

取り敢えずそう返しておく。

「……そっか」

フェイトはそう返事をするが、表情はまだ暗いままだった。
フェイトが何を言いたいかは何となくわかった。
先程の戦闘で何があったのか、などだろう。
話そうと思えば話せるが、他人に話せる程の情報は揃ってなく、何より社交性、協調性に欠けるネロは自分から進んで話すつもりなど無かった。

「……行くぞ」

ネロはそう言って部隊長室に向かうべく歩き出す。

「あ……うん」

歩き出したネロを見たフェイトが慌てて付いてくる。
フェイトが自分の事を心配してくれているのは解っていた。
他人に心配されて嬉しくない訳ではなかったが、自分は人間じゃない。

いつか右腕が暴走して周りの人間を傷付けてしまうかもしれない。
そう思うと、その優しさを受け入れる事ができなかった。
自分を心配してくれるフェイトがキリエと若干重なる部分がある故に……

Ｍｉｓｓｏｎ：９　～帰還～　（後書き）

今回は少し中途半端だったかなと反省……

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0388y/

Devil May Cry 4 ~StrikerS~

2011年12月16日01時54分発行